

家族や友人を自死（自殺）で亡くした人々の苦しみは深い。親しい人にも自死の事実を打ち明けられず、自分を責めてしまうこともある。遺族に寄り添う佛教界の取り組みが注目されている。静かに故人をしのぶ時間もつてもう追悼法要など、宗派を超えて様々な動きが広がっている。

（橋本誠）

# 苦しみ愈えない 自死遺族に寄りそう

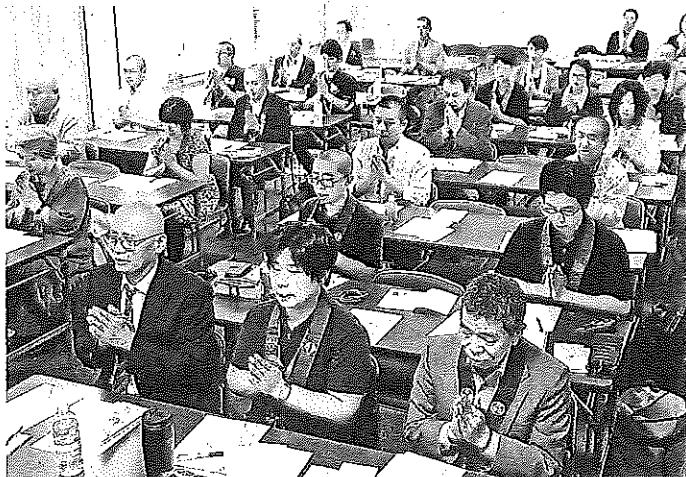
## 仏教界 宗派超えて法要や集会

五日に東京都港区の増上寺で開かれた浄土宗東京教区教宣師会「自死者追悼法要」の事前講習会。夫を亡くした女性が「本人が生きて帰らない限り、苦しみは終わらない」と話し、NPO法人グリーフサポート・リンク（全国自死遺族総合支援センター）の集いに参加して救われた体験を語った。

自死者の追悼法要是二〇〇九年に始まり、今回で九回目。僧侶たちは十日午後五時に増上寺で行う法要における、読経や会場案内などの役割を確認した。当日は浄土宗の法要となるが、どの宗派の人も参加できる。参加費不要。宗派への勧誘はない。

仏教界によるこうした活動は一九九〇年代から現れたという。全国の自殺者は一九八八年から十四年連続で三万人を超える状態が続いている。

自死者追悼法要の事前講習会に参加する僧侶ら=5日、東京都港区の増上寺で



自殺による死亡率  
日本ワースト6位

## 差別や貧困…「いのちの問題深刻」

「親族から、自殺を伏せるように言われた」「時間がたつたから元気になつたのでは」と言われ、人どつきあつのがつらかった

五日に東京都港区の増上寺で開かれた浄土宗東京教区教宣師会「自死者追悼法要」の事前講習会。夫を亡くした女性が「本人が生きて帰らない限り、苦しみは終わらない」と話し、NPO法人グリーフサポート・リンク（全国自死遺族総合支援センター）の集いに参加して救われた体験を語った。

た。

僧侶らは葬儀などでも、悲しみにくれる遺族に接してきました。大きな衝撃を受け、放心状態で十分な葬儀をできなかつたという遺族も多いという。東京都府中市蓮宝寺の小川有閑住職（三毛）は「突然お別れが来て

しまつので、断絶感や、もう一度会いたいという思い

が強い。親族が集まる法要で「一緒に住んでいてなぜ止められなかつた」と責められることもあり、ゆつくり故人をしのべない。自死者追悼法要に参加することで、亡き方と会えた気がするとか、つながりができる」という人が多い」と話す。

法要には大切な人を自死で亡くした人しか参加しない。同じ境遇の人たちが集うことでの、行慶寺の前田崇史副住職（四毛）も「誰かに気を使つこともない。涙を流している人もいる」と語る。

昨年の自殺者数は約二万一千人に減つたが、日本は各国の自殺死亡率でワースト六位と依然高水準にある。二〇〇七年に超宗派で結成した「自死・自殺に向き合う僧侶の会」は自死を

「差別や貧困、いじめや虐待、孤立や過度な競争、行へ。

昨年の自殺者数は約二万一千人に減つたが、日本は各国の自殺死亡率でワースト六位と依然高水準にある。二〇〇七年に超宗派で結成した「自死・自殺に向き合う僧侶の会」は自死を「差別や貧困、いじめや虐待、孤立や過度な競争、行へ。